

教師を育てた 言葉たち

No. 002

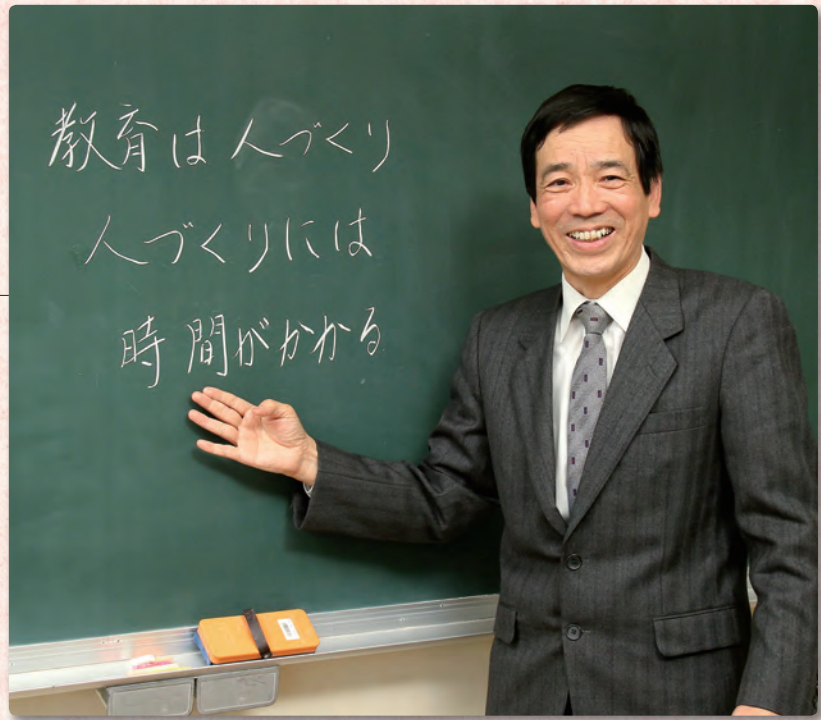
兵庫県立播磨農業高校

丸山正人先生

まるやま・まさと

◎教職歴 37 年。同校に赴任して 8 年目。
進路指導・人権教育部副部長。英語科。

兵庫県立播磨農業高校 全日制／農業経営科、園芸科、畜産科／共学／1 学年約 120 人／2017 年度進路実績（現役のみ）：進学は、高知大など 4 年制大 10 人、短大 2 人、大学校 7 人、専門学校 31 人。就職 58 人。



教 壇に立っているのに、生徒は誰一人教科書を出さずこちらを凝視するだけ。教科書を出すように指示しても従わない。無言の静寂が私を孤独に追い込む……英語教師として初めて臨んだ授業は砂漠のような風景でした。今思えば、その異様な雰囲気も、若輩の私の手並みを試すたわいないものだったかもしれませんが、未熟な私にはどう対処すればよいか分かりませんでした。次の授業も、その次の授業もひたすら私を凝視するだけの生徒たちになすすべもなく、底なしの泥沼に陥落していく自分に嫌悪しました。その一方で「教壇に立つ以上は泣きごとは言えない」と力みばかりが増えて、次第に学校へ行くのがとてもつらく感じられるようになっていきました。

2 週間ほど経ったある日の職員室で、英語科の先輩に「しんどいことでもあるのか？」と声をかけられました。周囲を気にして「何もありません」と答える私を、先輩は「うちに来なさい」と自宅に招いてくれました。夕食をともにし、いろいろと話すうちに、私は教室での出来事も打ち明けていました。夜を徹して語り合う中で、先輩からもらった言葉が、教師としての私の根幹となった「**教育は人づくり。人づくりには時間がかかる**」でした。

「生徒は無視や反抗をしているわけではない。君の出方によっては君を受け入れようとしているのではないか」「英語が嫌いな自分たちとどう向き合ってくれるのかを問いかけているのだ」と先輩は話してくれました。確かに私は、生徒の英語学力を高めよう

という気持ちを強く持ち、英語を教えることが自分の存在意義なのだと思っていました。先輩は「成績を伸ばすのも大事だけれど、それは教育の一部であり、目先の成果なのかもしれない。目の前にいる生徒たちに必要なのは、もっと別のものではないだろうか」と私に問いかけました。

翌 日、出勤する私の心にはそれまでにはなかった余裕が生まれていました。いつものように教科書に目もくれず私の顔を見つめる生徒たちに、「僕の顔に何かついているかなあ？」と初めて笑顔で返したところ、教室に笑いが起きたのです。それは、ちっぽけな変化ですが、「生徒に合わせて授業をしよう」と私が決意する大きなきっかけになりました。初任校は専門高校だったため、授業の導入で専攻に関連する英語を教えるようにしたのもその 1 つです。そうした私の変化に応じるように、生徒も少しずつ集中して授業に臨むようになりました。生徒が必要とする学びのあり方を教師が理解し、実践すれば、生徒は学びの意欲を持ち、学習への取り組みの姿勢も変化することを、私は生徒から学びました。

今日まで私は、様々な学校で様々な生徒と出会ってきました。英語が苦手な生徒が突然「先生、教えて！」と言ってきたり、卒業生が「先生のあのひと言で人生が変わった」と告白してきたり……自分とは違う人生を生徒を通して生きている、そんな感動を覚える瞬間が何度もありました。「教育は人づくり」という言葉には、生徒が教師である私を育ててくれるという意味もあるのだと思います。